

# 副葬される土偶

設 楽 博 己

- 
1. はじめに
  2. 土偶の役割
  3. 土偶副葬の系譜
  4. 土偶副葬の背景と再葬
  5. おわりに
- 

## 論文要旨

縄文時代の代表的な呪具である土偶は、基本的に女性の産む能力とそれにからむ役割といった、成熟した女性原理にもとづく象徴性をほぼ一貫して保持していた。多くの土偶は割れた状態で、何ら施設を伴わずに出土する。これらは故意に割って捨てたものだという説があるが、賛否両論ある。縄文時代後・晩期に発達した呪具である石棒や土版、岩版、岩偶などには火にかけたり叩いたりして故意に破壊したものがみられる。したがって、これらの呪具と関連する儀礼の際に用いたと考えられる土偶にも、故意に壊したものがあつた蓋然性は高い。壊したり壊れた呪具を再利用することも、しばしばおこなわれた。

土偶のもうひとつの大きな特徴は、ヒトの埋葬に伴わないことである。しかし、他界観の明確化にもなつて副葬行為が発達した北海道において、縄文後期後葉に土偶の副葬が始まる。この死者儀礼は晩期終末に南東北地方から東海地方にかけての中部日本に広まった。縄文晩期終末から弥生時代前半のこの地方では、遺骨を再埋葬した再葬が発達するが、再葬墓に土偶が副葬されるようになったり、土偶自体が再葬用の蔵骨器へと変化した。

中部日本の弥生時代の再葬には、縄文晩期の葬法を受け継いだ、多数の人骨を焼いて埋納したり処理する焼人骨葬がみられる。こうした集団的な葬送儀礼としての再葬の目的の一つは、呪具の取り扱いと同様、遺体を解体したり遺骨を焼いたり破壊して再生を願うものと考えられる。つまり、ヒトの多産を含む自然の豊饒に対する思いが背後にあり、それが土偶の本来の意味と結びついて土偶を副葬するようになったのだろう。

そもそも土偶が埋葬に伴わないのは、男性の象徴である石棒が埋葬に伴うことと対照的なありかたを示すが、それは縄文時代の生業活動などに根ざした、社会における性別の原理によって規定されたものであつた。土偶の副葬、すなわち埋葬への関与はこうした縄文社会の原理に弛緩をもたらすもので、縄文時代から弥生時代へと移り変わる社会状況を反映した現象だといえる。

## 1. はじめに

縄文時代から弥生時代へ移り変わる時期、中部高地・関東・南東北の中部日本では、葬制において再葬が一般化する。再葬とは、遺体を骨にして再び葬る葬法である。それは東海地方などに及ぶ。そして、縄文時代の代表的な呪具である土偶に、再葬墓に伴うものがみられるようになる。それと関連して注目されるのは、土偶容器である。これは文字どおり中空の土偶形の容器であるが、中に焼いたこどもの骨を納めたもので、やはり再葬に伴うものであった。

このような、再葬を葬法とする墓に土偶が伴う現象をどのように理解すればよいだろうか。それには土偶がもつ本来的な役割についての理解が前提となる。土偶の使い途にはさまざまな議論があるし、再葬の意義についても同じことがいえるので、この課題に対して万人が納得できる答えを用意することはできない。しかし、縄文時代から弥生時代へと変化する過程に起きたこうした現象に一定の解釈を加えておかないと、東日本における弥生文化の成立に対しては、一面的な理解しかできないことになる。

したがって、本稿ではあえてこの問題を取りあげ、土偶の副葬という一種の死者儀礼のなかに、東日本における縄文から弥生への変化の意味を探る手がかりの一端を求めたい。ただし、土偶に関して筆者は本格的な分析をしたことはないので、学説を整理しつつ妥当な解釈に依拠して論を進めざるをえないことと、再葬に対してはすでに発表している論考にもとづいていることをお断わりしておく。

## 2. 土偶の役割

**女性原理の象徴** もっとも古い土偶は関東地方の縄文早期前葉にみられる。千葉県木の根遺跡の撚糸文期の土偶は三角形をした頭も手も脚もないものであるが、大きな乳房をつけている。茨城県花輪台遺跡の土偶はそれに続く時期のもので、やはり大きな乳房をもつ。これには頭がついており、くびれた胴とよく張った腰を表現しているが、手脚はなく顔の表現もない。大阪府神並遺跡の早期中葉の土偶はたんに四角い粘土に乳房をはりつけたただけのもので、乳房だけで人体を象徴的に表している。鹿児島県上野原遺跡の早期中葉の土偶は、頭と手をもち乳房をはりつけているが、やはり顔の表現はない。土偶は成立当初から、何にもまして成熟した女性表現を重視していた。

中期以降の土偶には、妊娠した状態を腹をふくらませて表現したものも少なくなく、かつて男性土偶ではないかといわれた中部高地の縄文中期のある類型のものは、出産のシーンを表現したものだとして解釈されている。さらに例は少ないが、赤ちゃんを抱いたりおんぶし、子育てをしている状況をかたどったものもある(図1)。これに対して、明確に男性を表現したものはきわめて少



図1 子抱き土偶（東京・宮田）

ない<sup>(1)</sup>。山梨県黒駒遺跡の縄文中期の土偶は顔や手がヤマネコなどに似た動物を表現したもので、これには乳房がない。中部地方や南東北地方の後・晩期の仮面をつけた土偶にも、それを欠いたものがある。乳房をもたない土偶を中性だとする見解が提示されている〔小林 1988〕。穿った見方だが、上述の土偶を精霊を表現したものとすれば、これらに限っては中性であると理解できないこともない。しかし、縄文晩期にいたるまで多くの土偶が女性の象徴としての乳房を表現していることも事実である。こうした点からすれば、土偶は基本的に女性の産む能力とそれにからむ役割〔水野 1974・79, 桐原 1978〕といった、成熟した女性原理にもとづく象徴性をほぼ一貫して保持していたことを推測させる〔永峯 1977〕。

**土偶の出土状況** 土偶の性格を考える別の手がかりは、出土状況の検討と土偶の状態の検討である。その詳細は寺村光晴、野口義麿らがおこなった、遺構から出土した土偶の集成〔寺村 1961, 野口 1974〕や、その後加えられた検討〔桐原 1978, 米田 1984, 小野 1984〕に譲るとして、ここではそれを整理し、重要な点だけ指摘しておこう。

大多数の土偶は何ら施設を伴わない、いわゆる遺物包含層から石棒や石剣あるいは土版など、他の特殊遺物とともに出土するケースが多く、これらはなんらかの儀礼で使用された後に廃棄された状態を示すものであり、遺構に伴うものとはいえない。

一万を超える土偶のなかで、遺構に伴って出土した例は数えるほどしかない。そのうちわけは住居跡、土坑、土坑墓、石組、配石などであり、住居跡や土坑から出土したものには、堆積土の中に偶然まぎれこんだものもあるだろうから、さらにその数は減る。遺構に伴った土偶には、いくつかの傾向が指摘できる。まず、住居跡の床面や施設から出土するのは、中部高地を中心とした縄文中期にほぼ限られることである<sup>(2)</sup>。さらに、後期以降になると住居跡からの出土例は皆無に近くなる一方、配石の発達にともなって各種配石遺構からの出土がみられるようになり、そこに質的な差を認める意見もある〔小野 1990〕。石組の中から出土した土偶は群馬県郷原遺跡例〔山

崎 1954] など偶然の発見によるものが多く、郷原例の伝聞の信憑性には疑問が差しはさまれている〔能登 1992〕が、その一方、特殊状況下で発見された土偶が、大形で破損度が低いことに注目する向きもある〔植木 1990〕。たしかに石組内出土例の多くは出土状況が不確かで、近年、発掘調査が急増しているにもかかわらずこうした報告例がないことも問題である。しかし、土坑出土ではあるが長野県棚畑遺跡〔宮坂 1990〕のように、発掘調査によって大形の完形に近い土偶が集落中央の遺構から検出された例なども、見逃すことはできない。

土偶の出土状況としてもっとも注目すべき特徴は、北海道などの縄文後期後葉以降と中部日本の晩期終末以降の例を除くと、ヒトの埋葬に伴う土偶は皆無に等しいことである。かりに石組内から出土した山形県杉沢遺跡例〔酒井ほか 1954〕などの出土状況が正しいものだとすると、水野正好や桐原健らの言うように、それは土偶自体が埋納(埋葬)されたとみるべきもの〔水野 1974, 桐原 1978〕である。岩手県立石遺跡〔小野ほか 1979〕や千葉県西広遺跡〔米田ほか 1977〕などで、土偶は墓域と重なる分布を示すといわれるが、両者に関連があるか明確ではない。北海道などの例を除くと、縄文晩期終末以前に土坑墓からの出土はきわめて希なことからすれば、土偶は本来、副葬品としてヒトの埋葬に伴うものでないことは確かだろう。

**土偶の重層構造** 一つの遺跡から大量に土偶が出土する場合があるが<sup>(3)</sup>、そのほとんどが欠損した状態で出土することも、常に問題にされてきた。つまり、土偶の最終的な使用目的が、故意に破壊することにあつたのではないか、という議論である。これを評価する前に、若干の補足をおかねばならない。それは、すでに述べたように、特殊な出土状況を示す土偶にほとんど欠損していないものがある、という点に関することである。

水野正好は縄文早期から土偶は壊されていたとする〔水野 1974・79〕が、谷口康浩は早期の土偶や前・中期の板状土偶などは、壊すことを目的としたものか疑わしく、土偶が壊されるのは中部高地の中期における有脚立像成立以降だとみる〔谷口 1990〕。岩手県小田遺跡では晩期の土偶113点のうち、完形は1点で、他はすべて破損していた〔中村ほか 1979〕。そのほとんどがいわゆる遮光器土偶だが、相対的に小形のものが多い。ところが遮光器土偶のなかにはたとえば岩手県恵比寿田圃遺跡例などのように、薄手中空で壊れやすいにもかかわらず、完形ないしそれに近いものがある。これらは大形でつくりがよく、遮光器土偶はつくり分けと使い分けがなされたことを考えさせる。

林謙作は、東北地方の晩期の土偶には大小の遮光器土偶とその形をとらない装飾性の少ない三者があり、個別の儀礼にかかわるのは装飾性の少ないもので、遮光器土偶は集団儀礼にかかわり、その大小は集団の規模を反映しているとした〔林 1976〕。鈴木正博は、個人にかかわる土偶と集団あるいは集団間の関係にかかわる土偶として、下位土偶と上位土偶という概念を設けた〔鈴木 1982〕。棚畑例が集落の中心の土坑から出土したことを考え合わせると、中期以降、土偶とそれをめぐる儀礼が重層化していったことがうかがえる。

**土偶破壊論争** 水野正好は土偶の破壊を積極的に評価して、それを土偶祭式の復元に活用した

〔水野 1974・79〕。水野は土偶はすべて女性を表現したもので、土偶は祭式において、母となるべき土偶、子供を身ごもる土偶、子供を育てる土偶と成長し、破壊することで殺され、そしてバラバラにした破片を集落の各所にまいたり分配し、あるいは埋葬することによって新生に力を与えた、と考える。つまり、土偶祭式を女性原理の実修と確認、ととらえたのである。ヒトの分娩を死とみなして、そのなかから新たな生命が再生するというサイクルと土偶の一生を重ね合わせたのは興味深い。さらに解釈を進めて、まかれた土偶が作用したのは畑も含む食物調理の場など、集落内の全女性原理であると考えた。

水野説や土偶故意破壊論を受け、藤森栄一は破壊される土偶を古事記に登場する殺された身体から栽培植物などが生じたオホゲツヒメと重ね合わせ〔藤森 1969〕、吉田敦彦は土偶の破壊とセラム島のヴェマーレ族の神話などに登場するハイヌヴェレの殺害<sup>(4)</sup>を関連づけて〔吉田 1976〕、縄文農耕論の、あるいは日本神話にみるモチーフが縄文時代にまでさかのぼることの立証材料にしようとする。かつて八幡一郎が厳しく批判した〔八幡 1939〕鳥居龍蔵の土偶地母神説〔鳥居 1922〕が、形をかえて復活したものとみなせよう。

土偶が破壊されるものだという根拠の一つとして、破片状態で出土する率がきわめて高い、ということが古くから潜在的に意識されていたが、具体的な分析をしたうえでの結論ではなかった。野村崇は北海道札苅遺跡出土の土偶の破損状況を分類し、右腕の破損が多いことから意図的な破壊の儀式を示唆した〔野村 1974・76〕。岩手県立石遺跡から出土した後期の土偶212点もすべて破片であった〔小野ほか 1979〕。立石遺跡出土土偶の欠損状態を調べた小野美代子は、頭部を筆頭はかなりの小片にされていること、接合した土偶の数が全体の8%にすぎないことや破損面の観察などから、壊されてバラバラに放置されたと推定し、近隣の他の集落に持ち出された可能性にも触れている。長野県増野新切遺跡では離れた住居跡の覆土から出土した土偶で接合するものが数組見つかっており〔長野県教育委員会 1973〕、水野は土偶を壊してまいたことの具体的証拠とみなす〔水野 1979〕。そもそも土偶は壊しやすいように製作しているのではないかということが製作技術の面から示唆され〔武藤 1975, 小林 1977〕、分割塊製作技法と名づけて研究されている〔小野 1984ほか〕。

小林達雄は土偶の故意の破壊に対しては、技術的な観点から積極的にそれを認める立場に立つが、こうした破壊行為に対する意味づけについては懐疑的である〔小林 1977〕。磯前順一は逆に破壊の意義は水野説に近い立場を取りつつも、壊すための製作技法という視点には批判的である〔磯前 1987〕。

さらに、破壊自体も故意のものであるか否か疑わしい、という反論もある。藤沼邦彦は、土偶の破損率は土器など他の土製品のそれより著しく高いとは思えないとし、土偶の破損した箇所は壊れやすい部分に集中すること、故意に傷つけた痕跡がないこと、アスファルトで接着して割れたものを補修して再び使用していたものもあることなどから、土偶は土器などとともに壊れれば一括廃棄したものではないか、と水野説を批判した〔藤沼 1979〕。能登健も同様の立場に立ち、

さらに土偶の製作技法と土器の製作技法の一致、土器など他の生活遺物と同じ包含層からかたよりに出土する例が多いという廃棄のあり方から批判したが、一連の遺物が廃棄された結果、縄文時代特有の遺物包含層が形成されることを、土偶だけに特定せずに分析する必要性も説いている〔能登 1983・92〕。

このような批判を受けた浜野美代子は、埼玉県赤城遺跡の土偶の出土状況と製作技法を分析したうえで、土偶が壊されるものとする説は検証不十分として安易に土偶故意破壊説に傾くことに警鐘を鳴らしている〔浜野 1990〕が、破壊説を否定しているわけではない。つまり、赤城遺跡の土偶もすべて破片状態であるが、廃棄に一定の法則があるわけではなく安置や埋納といった行為は認められない。廃棄される以前に破片になっていたことだけは確かであるが、それ以上のことは言えず、中空土偶のつくり方も土器と変わらない、というもので故意破壊説の実証性に疑問を呈したのである。

このように土偶故意破壊論に対しては評価が定まらない。結局のところ出土状況とともに、土偶自体の細かい観察の蓄積がなくては確かなことが言えないわけだが、これにしても故意に傷つけた痕跡がないという批判に対しては、手のなかでポキンと折ったと反論するように、水掛論に終わってしまう危険性もある。そこで視点を変えて、他の祭祀的性格をもつと考えられる特殊遺物一呪具一のあり方を加えつつ検討してみるが、その前に副葬品としての土偶の諸例を整理し、検討してみることにしよう。

### 3. 土偶副葬の系譜

**副葬された土偶** 土坑から出土し、副葬されたと考えられる土偶や、それ以外の埋葬に伴う土偶を渉猟する。中村良幸は、すでに墓坑などの土坑や墓域から出土した土偶を集成しており〔中村 1989〕、長沼孝は北海道の土偶には副葬されるものが多い点を指摘している〔長沼 1992〕。鈴木正博も副葬された土偶に注目している〔鈴木 1993〕。「土偶とその情報」研究会では土偶を全国的に集成し、『土偶とその情報』を刊行している〔国立歴史民俗博物館 1992〕ので、それらを叩き台にして整理していきたい。その際、土偶形容器も合わせてみていこう。

#### ① 北海道南茅部町著保内野遺跡〔小笠原 1976〕

土偶は耕作中に破片で出土したものが、後に復元されたものである。追跡調査によりその下に170×60cmの長方形の土坑の存在が確かめられ、土偶はこれに伴うものであったと推定されている。この推定が正しければ、土偶は地表下30cmほどのところから出土したと伝えられているので、土坑の底ではなく墓の上、あるいは覆土上層に副葬されたものと考えられる。

土偶の時期は縄文後期後葉であり、両腕を欠く以外はほぼ完形に復元された。41cmと大きく中空のつくりである。

#### ② 北海道千歳市美々4遺跡〔森田ほか 1984〕

遺跡からは4～5基の環状周堤墓が発掘されており、その時期は縄文後期中葉～晩期初頭である。周堤墓の土坑には、土器のほかに磨製石斧、石棒、石鏃、石錐などを副葬したものがあり、玉や櫛が出土するものもある。環状周堤墓の一つであるX-1の周堤上に掘り込まれた、1.4×0.95mの楕円形の土坑（P-373）から土偶が出土した（図2-1）。土坑の底に敷かれていたベンガラを除去した後に、土坑の北西隅からうつぶせの状態出土した。副葬品は他にスクレイパー、台石、石皿、土器が出土したが、それらは墓坑覆土の中～上層で、埋め戻しの際の副葬と考えられている。

土偶は縄文後期終末～晩期初頭の御殿山式の時期のもので、高さ20cmをはかり、完形である。手の先を外側に開く特徴をもつ。

### ③ 北海道静内町御殿山遺跡〔河野ほか 1954〕

遺跡からは積石墓が群集して検出されている。土偶は、そのうちの一つである「第6号墳」という土坑の周辺から出土した。土坑の底にはベンガラが敷かれ、中央に石斧が副葬されていた。副葬品は他に土坑覆土上層から2点の完形土器、土坑周辺から土器が出土している。土偶の脚一對は、東南部外側から出土した。

その後の調査と整理によって、頭部と胴部が見いだされ、顔面の一部と右腕を欠失したほぼ完形の状態に復元された。高さは約20.3cm。土偶の時期や型式は、美々4遺跡例と同じである。

### ④ 北海道根室市初田牛20遺跡〔中村 1989〕

分布調査により、9点の土偶の破片が採集され、それらはほぼ全体をうかがえるまでに接合した。さらに発掘調査で9点出土し、いずれも接合した。出土したのは第1層で、第7層のローム上面まで掘り下げると、2基の土坑墓が並んで検出された。土坑からは人骨が出土しており、いずれも成年で性別は1体が男性と判明した。土坑は1.5×1m程の楕円形で、坑底にベンガラが敷かれ、石斧、石鏃、石錐、槍先状尖頭器、環状土製品などが副葬され、人骨には櫛や玉がともなっていた。土偶の破片は墓を中心とした半径3mの範囲に納まる。また、人面のついた土製品が出土したり採集されたりしているが、あるいは異形土器の装飾かと思われる。

土偶は御殿山式の時期のもので、ほぼ完形で高さ18.2cmをはかる。型式は美々4例などと同じだが、乳房の表現がない。ベンガラが付着している。破片の状態出土したが、故意に壊されたものではないと推測されている。

### ⑤ 北海道斜里町朱円遺跡〔宇田川 1981〕

環状周堤墓の土坑（A号土籬1号墓）から、土偶が出土している（図2-3）。土坑の形態は不明だが、上層に石が積まれ、その下と坑底にベンガラが敷かれている。土偶はベンガラの上から、土器、漆器、石匙とともに出土した。

土偶は縄文後期終末ないし晩期初頭であり、高さは6.9cmをはかる。頭部と右腕を欠いており、脚はもともとつくられていない。表面に三叉文が彫られた板状のもので、乳房の表現はない。

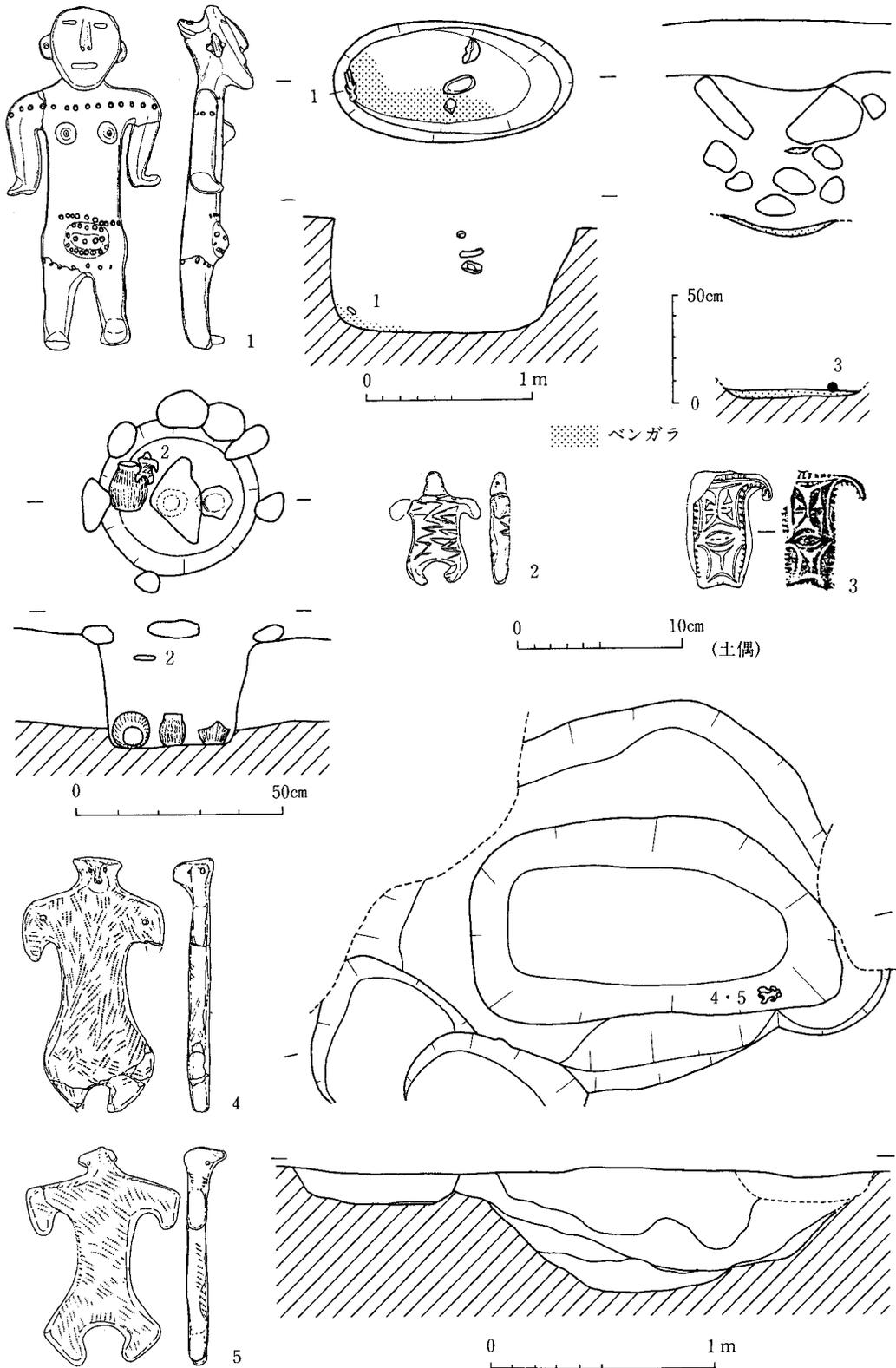


図2 北海道の副葬された土偶 (1:美々4, 2:高砂, 3:朱円, 4・5:大麻3)

## ⑥ 北海道虻田町高砂遺跡〔峰山 1967〕

縄文晩期後葉の大洞C<sub>2</sub>式の土坑が14基検出された。それらには配石をもつものがあるが、土偶はまわりに石を配した円形の土坑から出土している(図2-2)。土坑の底に壺形土器など3個納め、覆土の上層にうつぶせに土偶を置いている。

土偶も大洞C<sub>2</sub>式のものである。右腕を欠失する以外は完全で、高さ6.8cmである。板状で頭部はあるが顔面の表現はなく、乳房の表現もない。

## ⑦ 北海道江別市大麻3遺跡〔高橋ほか 1986〕

小判形をした2.2×1.2mの土坑から、土偶が2個体出土している(図2-4・5)。土偶は2体が重なって、土坑覆土上層の壁ぎわから検出された。

土偶は縄文晩期終末のタンネトウL式であり、特徴的な薄い板状のものである。欠損部分のない完形品である。大小があり、大きいほうは高さ15.4cm、小さいほうは13.3cmである。大きいほうにだけ簡略化された顔面表現があり、いずれも乳房など性の表現を欠いている。大きいほうが下になり、背中あわせのかたちで重なって出土した。

## ⑧ 青森県木造町亀ヶ岡遺跡〔鈴木ほか 1984〕

2基の土坑墓からそれぞれ1点ずつ出土している。9a号土坑では床面から少し浮いた状態で出土した。共伴遺物は土器、円盤状石製品、石錐である。11号土坑はベンガラを敷いており、土偶は覆土から出土している。共伴遺物は石鏃、土器片である。

9a号土坑の土偶は縄文晩期中葉大洞C<sub>1</sub>式で、土偶は体部破片。11号土坑の土偶は晩期前葉大洞B-C式で、中空土偶の乳房の破片である。

## ⑨ 福島県三春町西方前遺跡〔仲田ほか 1987〕

2.15×1.65mの不整楕円形の土坑から土偶が出土している。土坑底面からは土偶とともに完形品を中心とした土器が9個体不規則な状態で出土しているが、それらは壺、甕、鉢、台付鉢といろいろな器種を網羅している。広口壺の底部は円形に打ち欠かれているようであり、この土坑が墓である可能性を示している。

土偶は晩期終末大洞A'式のいわゆる結髪土偶であり、胴部以下を欠失している。現存での高さ20cmをはかる大形品である。

## ⑩ 福島県富岡町毛萱遺跡〔馬目ほか 1972〕

A地点遺構2という、2.6×2.0m程の不整円形の土坑から土偶が出土した。土偶は土坑の底からやや浮いて出土したことが、写真から判断される。

土偶は弥生中期前葉の土器と共伴していた。脚部の形はすそ広がり台状を呈しており、頭部の半分と両腕の先を欠失するが、あとは完全である。高さ8.4cmをはかる。いわゆる黥面土偶の流れを汲むもので、顔面の表現は失われており、黥面土偶のなかではもっとも新しいもののひとつである。

⑪ 群馬県藤岡市沖II遺跡〔荒巻ほか 1986〕

沖II遺跡からは、壺棺再葬墓が27基検出されている。土偶は、それら壺棺再葬墓とは別の、径約80cm程度の不整形円形土坑(ED-2)の覆土中から出土した(図3-3)。土坑から出土したのは胴部で、頭部は離れた地点から出土した。土坑の底から土器の底部が出土した。

いわゆる黥面土偶であり、高さ13.3cmをはかる。脚部はすそ広がり台状であり、顔面の半分と両手の先を欠失しているが、あとは完全である。弥生前期終末の沖式土器に伴うものである。

⑫ 愛知県一宮市馬見塚遺跡〔澄田ほか 1970〕

馬見塚遺跡は晩期後葉から終末の遺跡で、1963年のF地点の調査で焼人骨が入った7基の土坑や、5基の土器棺などが出土した。土偶は6号ピットという、わずかな人骨片が入った径40cm、深さ25cmほどの土坑のわきから土器片などとともに出土した。土坑上面との間に5cmほどの間隔があり、土坑に伴うものか不確定とされる。

土偶は頭手脚を欠いた、板状のもので、乳房をもっている。首に頭を接合するための軸穴がある。大きさは9cm。共伴した土器からすると、縄文晩期後葉の五貫森式である。

⑬ 愛知県豊川市麻生田大橋遺跡〔前田ほか 1993〕

麻生田大橋遺跡は238基の土器棺墓が出土した、埋葬を中心とした遺跡である。土偶が出土した土坑は2基あり、SK104からは土偶の胴部と石剣が、SK125からは、2体の土偶が出土した(図3-1・2)。SK125の土偶には大小があり、大きいほうは土坑の底部付近、小さいほうは覆土中から検出された。

SK104の土偶は板状で、乳房をもっている。縄文晩期終末の馬見塚式に伴うものと思われる。SK125の土偶は、大きいほうは高さ16.8cmで乳房をもち、小さいほうは8.7cmで乳房がない。2体ともほぼ完形であるが、大きいほうはいくつかに割れたものが接合した。弥生前期後葉の樫王式に伴うものである。

⑭ 長崎県北有馬町原山遺跡〔森 1983〕

原山遺跡は支石墓を中心とした埋葬遺跡である。土偶は3号支石墓の上石に接する耕作土から出土した。墓坑の底から打製石鏃が1個出土している。

土偶は小ぶりの楕円形のもので、両腕は小さくついているが、脚はもともとない。頭部は欠失している。乳房をもつ。弥生早期の夜臼式である。

⑮ 長野県丸子町淵ノ上遺跡〔和田 1917〕

土偶形容器は土偶から派生した、中空で裾の広がった台状の脚を有する大形の容器である。黥面土偶のうちの脚のないものを大形にしたようなものである。淵ノ上遺跡からは土偶形容器が2体、並列して出土した。これらには大小がある。大きいものは現存高31.2cm。乳房があり、頭部を欠いている。小さいものは高さ36cm。完形で乳房がない。付近から骨や歯が出土した。弥生前期末～中期初頭。

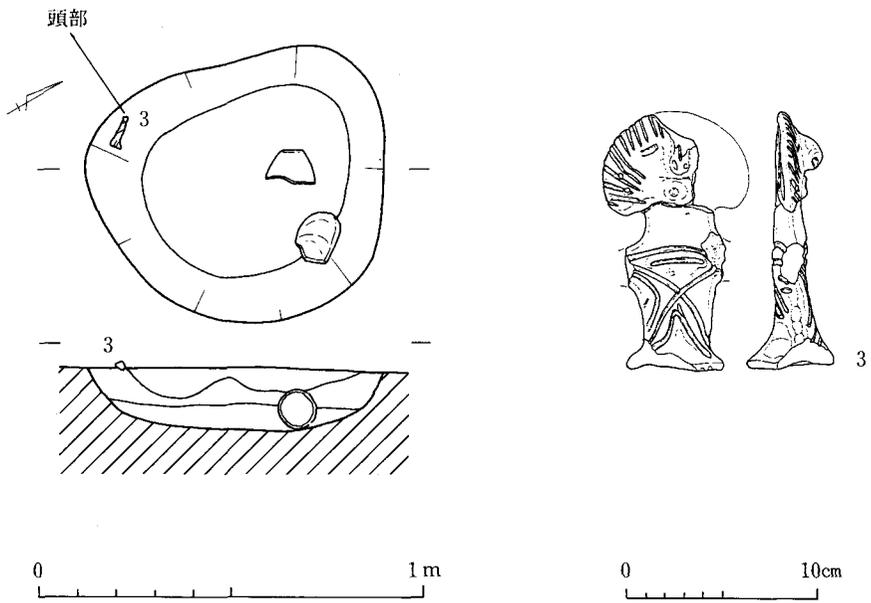
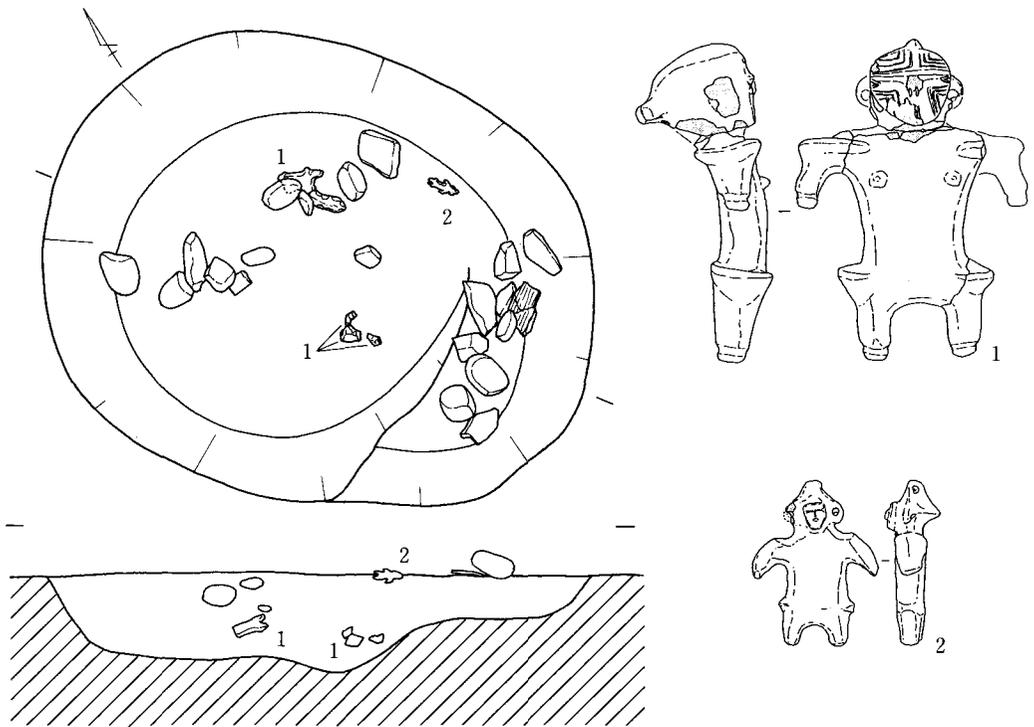


図3 副葬された土偶 (1・2：愛知・麻生田大橋, 3：群馬・沖II)

⑩ 山梨県八代町岡遺跡〔八代町 1975〕

土偶形容器が2体、灰と焼土の中から出土した。大小がある。いずれも完形で、大きいほうは高さ27.4cm、小さいほうは23cm。中に幼児の骨と歯が入っていた。弥生中期前葉である。

⑪ 神奈川県大井町中屋敷遺跡〔甲野 1939〕

土偶形容器が径1mの灰状骨片中からうつぶせの状態出土した。完形で、高さ26.8cm。中に初生児の骨と歯が入っていた。弥生中期初頭。

**土偶副葬の系譜** このように、副葬される土偶の中心は北海道と中部日本にあることがわかる。北海道の副葬土偶の特徴は、後期後葉に始まり後期終末にピークがあること、完形あるいはそれに近く大ぶりの土偶が多いこと、新しくなるにしたがい乳房の表現を欠くようになること、土坑の坑底のほか、埋め戻し終了まぎわあるいは終了後の覆土上層などから出土する場合があること、縄文晩期終末には2体いっしょに出土する場合のあることなどである。中部日本の副葬土偶の特徴は、再葬墓と関わりをもつこと、晩期終末から弥生中期にピークをもつこと、乳房の表現を欠いたものがあること、覆土上層から出土する場合があること、2体いっしょに出土する場合のあること、弥生時代になると、土偶形容器という再葬の蔵骨器が派生することである。

土偶の副葬は、北海道では晩期終末まで継続するので、時期的な点やいろいろな特徴から、一応北海道から中部日本へと伝播した習俗と考えられるが、もう少し検討してみよう。土偶の副葬が始まる北海道の縄文後期後葉は、特異な時期である。それは環状周堤墓の成立という墓制における大きな変化とともに、土坑墓への副葬行為が明確になる点にあらわれている。土偶の副葬も、副葬習俗の確立の一貫として理解しなくてはならない。副葬品で特徴的なものとしては石棒類と土器があり、美々4遺跡や柏木B遺跡などに顕著に認められる。この組み合わせは栃木県小山市乙女不動原北浦遺跡にみられ〔三沢ほか 1982〕、時期は安行3c式を中心とするものであるから、大洞系土器の流入という現象とともに東北地方を経て北海道に主体のある習俗が関東地方に伝播したものと理解できる〔新津 1985〕。これは土偶副葬習俗の北海道からの伝播と関連するものであり、亀ヶ岡遺跡から出土した副葬土偶は、この習俗の晩期における広がりをも説明する資料といえよう。

福島県の西方前例は、中部日本では比較的時期の古い副葬土偶であり、この土偶は東北地方に広く分布する結髪土偶である。弥生時代の初期に中部日本一帯に定着する大形の壺を蔵骨器に用いた壺棺再葬は、まず福島県の会津・中通り地方で成立し、各地に広がった〔設楽 1994a〕。そうした流れののち、土偶副葬の習俗も関東、中部地方にもたらされた可能性は十分にある。

しかし、中部日本でもっとも古い副葬土偶は大洞C<sub>2</sub>式に並行する愛知県馬見塚遺跡の例であり、この土偶は東北地方の影響下にあるとは考えにくい。むしろ西日本の土偶との関係が考えられ、そうなるなら鈴木正博が重視する九州の副葬土偶〔鈴木 1993〕との関連性も考慮しなくてはならなくなる。したがって、中部日本における土偶副葬の習俗の系譜は、まだ断定的なことのいえる状況ではないが、ここでは北海道方面からの影響を考えておきたい。

## 4. 土偶副葬の背景と再葬

**他界観の明確化** 土偶副葬の背景について考える前に、死後の世界観すなわち狭義の他界観の形成ということについて述べておきたい。考古学的に他界観の存在やその形態を証明することは至難の技であるが、いくつかのてがかりを考えてみると、霊がよりつく墓標がたてられたり、現在の位牌のようなかたちで家のなかに霊の依り代がもちこまれたりすること、他界で生活するための副葬品が墓に納められること、死後の世界が形成され、墓域が居住域から独立していくこと、モガリに類する死の確認の手続きがとられ、再葬が認められることなどがあげられる。他界観の存在を確認するためにはこれら全部がそろっている必要のないことはいうまでもなく、ひとつでも充足される場合がある。しかし、上にあげた個々の要素は、必ずしも他界観と直結しない場合もある。たとえば墓標は新しい墓を築くときの重複をさけるための目印かもしれないし、副葬は生前に築いた威信を財物として墓にもちこむ理由でおこなう場合もあるだろう。また、新たに埋葬をするためにすでに葬られている遺骨を片付けた改葬が、あたかも再葬のようなかたちをとる場合がある。

縄文早期には、洞窟遺跡で先葬者の遺骨を集めた埋葬がしばしばみられるが、これなどは改葬か再葬か明確にしがたいものが多い。遺体に大きな石をのせた抱石葬や、遺体を折り曲げた屈葬は縄文早期にすでにみられるが、これらも死者に対するなんらかの観念の表現ではあっても、すぐにそれが他界観の存在に結びつくものではない。縄文前期の北海道から本州中部において、漆製品や特殊な土器を墓に副葬する例がみられるが、他界観のあらわれなのか威信財の副葬なのか、あるいは両方の意味があるのか明瞭ではない。

大塚和義は、縄文時代の葬制の発展の諸段階を整理し、乳幼児を対象とした甕棺葬の出現、屈葬に加えて伸展葬が登場したことと、長野県阿久遺跡や上原遺跡などで環状集石墓がみられるようになるといった事象から、縄文前期中葉をひとつの画期としてとらえている〔大塚 1979〕。阿久遺跡の集石は再葬墓であるとの推測もなされており〔笹沢 1982〕、地域は限定されるものの、葬制上の変化はこの時期に認められるが、他界観念の形成がもっとも明確になるのは、大塚も指摘するように北海道地方の縄文後期後葉である<sup>6)</sup>。また、東北地方北部の縄文後期初頭～前葉も注目すべき時期である。

縄文後期初頭から前葉の十腰内Ⅰ式に、青森県を中心として再葬甕棺墓が発達した〔葛西 1983〕。これは大形の壺に近いかたちの土器を蔵骨器とし、その中に再葬人骨を納めて土坑や石櫛状の施設に埋納したものである。再葬の一次葬の場所としては、石棺墓が想定されているが、これらの遺跡はしばしば居住域とは異なる丘陵上に立地する場合がある。北海道では、後期後葉に環状周堤墓が形成されるが、これは居住域から独立して竪穴住居をモデルにつくられた、死者の家と呼ぶべきものである。墓坑には、大量の副葬品を納めることがあった。こうした他界観の明

確化は、祖先に対する意識も高揚させたと考えられる。縄文後期以降、土製の仮面が西日本に及ぶ範囲でつくられるようになったが、民族誌で仮面儀礼は祖先を呼び出す儀礼のもとにおかれる場合が多いとされるのは、そうした現象を理解するうえで参考になろう。土偶の副葬も、このような脈絡のなかで考えていかねばならない。そこで土偶の役割の議論に戻るが、土偶以外の呪具の取り扱いという視点から土偶破壊論争に評価を加えたい。

**呪具の破壊行為** 東北地方の縄文晩期には石でつくった岩偶があらわれる。渡辺誠は青森県石亀遺跡出土の岩偶の首から胸にかけての割れ口にクサビ状の傷を観察し、故意に割ったことを立証している〔渡辺 1979〕。土版・岩版は晩期にいたって東北・関東地方を中心に普及した板状もしくは中空の製品である。小杉康はこれらの製作完了以降にみられる変形行為に詳細な検討を加えた〔小杉 1986〕。その結果、製品が廃棄されるまでの間には、多くの変形行為が存在することを明らかにした。そのなかで、たんなる欠損との区別がむずかしいとしながらも、打ち欠きや打ち割り例が存在することを指摘している。たとえば破片を接合すると、器面中央付近に打撃痕が復元できる例があることを実証的につきとめた。

似たような変形行為の痕跡は、石棒類<sup>(6)</sup>にも認められる。山田康弘は石棒類の頭部に研磨などによる摩滅痕がみられ、それによって線刻文様の溝が擦り減って途切れている場合があることをいくつかの事例をあげつつ示している〔山田 1994〕。小さな破片になっても欠損面を磨いてさらに使用した形跡のある石棒類は、枚挙にいとまがない。さらに、石棒類には火を受けてバラバラになったものが接合する例も数多く、廃棄などに際して故意に壊す行為があったことを暗示している<sup>(7)</sup>。東京都下布田遺跡の石剣は、磨かれた割れ口が火を受けている<sup>(8)</sup>。千葉県能満上小貝塚では、3棟の離れた住居跡から出土した安行3c式のイノシシ形土製品<sup>(9)</sup>が接合した〔忍澤 1994〕。さらに、縄文中期の中部高地に始まり、後・晩期に配石に伴う儀礼として一般化する獣骨や人骨を焼く儀礼〔高山 1977〕も、火による破壊行為という観点からは、関連する要素をもっている。新津健は石剣を分析したなかで、石剣は最終的に破壊され、ときには火に投ぜられるという金子裕之の指摘〔金子 1982〕を引きつつ、破壊行為は他に土偶や獣骨にも認められるとして、破壊したあと一部のものは火で浄化して再生を願ったと考えている〔新津 1985〕。

こうしたことは、小杉のいうように、呪具の変形行為が連続的な儀礼行為の一貫としてとらえられることを意味している。さまざまな呪具が製作され廃棄されるまでの間に、儀礼的行為の複雑なプロセスが存在していたと予測されるのであり、最終的に故意に破壊される場合もあった。呪具がどのような儀礼のなかで使用されたのかは、いまだに明らかとはいえない。それは縄文人には呪具を用いた儀礼の場を長く将来にとどめようという意識が薄かったためであり、我々はその使用の最終形態を、廃棄の場によって確認するのがせいっぱいだからである。縄文後・晩期になるとこうした数多くの種類の呪具がまとめて捨てられているのが、埼玉県赤城遺跡〔新屋ほか 1988〕や後谷遺跡<sup>(10)</sup>などにあり、さらに儀礼が完了した段階で呪具が放置されたような状態のまま出土した例が、長野県中村中平遺跡〔馬場ほか 1994〕で確認されている<sup>(11)</sup>。この事実

は、これらの呪具を用いた構造的な儀礼が存在していたことを暗示するものであって、土偶もそうした儀礼に組み込まれていたことは容易に類推することができる。

**土偶の再利用** 谷口康浩や原田昌幸は壊れた土偶の再利用を指摘している〔谷口 1990, 原田 1990〕。先述の増野新切遺跡には、脚のなくなった土偶の破損面を研磨して平らに加工した例がある。福島県西方前遺跡の土偶は、割れた面に朱を塗っている。また、山梨県釈迦堂遺跡では、200 m以上離れた地点の土偶が接合した。こうした例は、土偶はたんに壊れたものを捨てただけではなく、割れてからもなお複雑な利用があったという点で、他の呪具との関連性をうかがわせる。土偶自体に損壊の痕跡は乏しく、分割整形技法もそれが破壊のための製作方法だとするには根拠が薄いというものの、以上述べたいわば状況証拠は、最終的に土偶は壊される場合もあったという可能性を物語っているのではないだろうか。

**身体加工と死と再生** 縄文中期以降、とくに晩期に抜歯などの身体加工が発達する。その不可逆的な印を身体に刻むもっとも重要な意義は、成人式などのイニシエーションであり、非常な苦痛を伴う儀礼のなかで真の人間になるための儀式である〔坂井 1988〕。それは広い意味での通過儀礼であり、いったん死ぬことによって、その前身を換骨奪胎して解体し、新たなものへと再生することを意味するという〔桜井 1974〕。石棒、石剣、土版、獣骨や人骨、そしておそらく土偶が壊されていることに、死と再生にからむ構造的な儀礼が存在したであろうことを推測させるが、それは究極的にはヒトを含む自然の多産を願うものであったろう。

すでにとりあげたハイヌヴェレ神話と土偶破壊との類似性の問題をそのまま扱おうと、ウィーン学派の文化伝播説と C.G.ユングの人心同一律説とのいずれかの選択を迫る問題とも通じてしまうので、筆者の手におえるものではない。筆者は、縄文時代の考古学的な事象の組み合わせから、土偶、石棒、石剣、土版、そして動物や人間の骨に火を加えたり、打撃を与えて破壊するという共通行為があり、とくに縄文後・晩期にそれが場を異にしておこなわれた別々の儀礼である可能性はあるものの、大局的には一つの共通した意味をもつ儀礼複合として遂行された可能性だけに注目したいのである。土偶のみならず、石剣、土版、獣骨の類も破壊しているとなれば、ことさら女神の殺害と穀物の再生をこれに結びつける必然性はなくなり、ハイヌヴェレ神話と縄文土偶の破壊を同一視することも困難となるだろう。

ハイヌヴェレ神話が日本神話に色濃く影を落としている可能性はあるが、それが縄文時代にまでさかのぼることの証明は、無理だといわざるをえない。むしろ、ハイヌヴェレ神話などの根底にある、たとえばイニシエーションなど通過儀礼一般の、死が再生の前提になるという、より根源的な部分での一致であれば認めることができるかもしれない。そうした死を前提とした再生の論理は、女性性を問わずに認められるのであり、それが縄文時代の土偶を含む呪具とその破壊の背景として重要な意味をもっていたのではないだろうか。

**土偶の副葬と再葬** 北海道の副葬土偶は、大ぶりで完形に近いものが多く、いわゆる上位土偶の範疇で理解できるものであろう。上位土偶、下位土偶という区分は、いわれるように集団全体

に関わるものと世帯あるいは個人レベルに関わるものという、儀礼の規模の差に応じたものであろう。そうであるならば、その役割には本質的な差はないように思われ、ともに多くは死と再生の一連の儀礼のなかで機能したと考えられる。

未開社会においては死と再生に対応するあの世とこの世との往還が、各種のイニシエーションにおいて儀礼的に表現されることが多いとされ、そうした他界と直接交流できるのが、シャーマンなどの職能者である〔佐々木 1987〕。土偶の副葬は、北海道を中心に他界観が明確化していくなかで、再生観を背景に始まったと思われるが、土偶が副葬される土坑墓は、他の副葬品をもつ土坑墓に比べてあまりにも少ない。上位土偶を扱うシャーマンのような、集団的儀礼の限られた執行者個人の墓に入れられたことがその理由として考えられる。

縄文時代には、多人数の遺骨を再埋葬したり焼いたりして合葬する多人数集骨葬がしばしばみられる。常総台地における縄文後期初頭～前葉と、中部高地を中心とした縄文晩期には、それが制度として発達した。多人数の遺骸を処理する再葬には、祖先や集団の始祖との結合を強化する役割のあることが推定されており、その背景に集団移動や集落の再編成など、社会的な要因が考えられている〔渡辺 1991, 山田 1995〕。中部日本の弥生時代初期には壺棺再葬墓が発達するが、社会的な変動に応じてこうした再葬にからむ葬法が成立、普及するものであるならば、集落構成員すべてがかかわるようになった、死と再生の論理に裏打ちされた儀礼である焼人骨葬と壺棺再葬が複合した壺棺再葬制は、縄文晩期以来の気候の寒冷化や異文化との接触などにより、経済基盤までも変動することを余儀なくされた社会状況を背景として、集落構成員の結束を祖先との結びつきなどによって強めるために出現し、定着した墓制だといえよう〔設楽 1993・1994 a〕。

土偶形容器と黥面土偶の関係は、上位土偶と下位土偶の関係だといえ、基本的な構造は縄文中期以来の土偶の延長線上にある。中部日本においては、再生のシンボルとしての土偶は、北海道方面からの土偶副葬という習俗の影響を受け、再葬を導いた祖先に対する意識の高揚や再生観と結びついて再葬墓に副葬されるようになったのではないだろうか。

## 5. おわりに

土偶は本来、副葬されることがなくヒトの埋葬に直接関わるものではなかった。土偶とともに縄文時代の呪具を代表する石棒類は、墓に副葬されたり、墓域にたてられたりする場合がある。おそらく女性がつくったであろう土偶は女性原理の象徴であり、男性がつくったであろう石棒はいうまでもなく男性をシンボライズしたものである。水野正好のいうように、石棒を用いた男性のマツリと土偶を用いた女性のマツリが分かれてとりおこなわれていたか否か不明とはいふものの、土偶と石棒類のありかたには、かなり対立的な原理が作用しているといつてよい〔水野 1983〕。それを受けて埋葬におけるありかたまで含めて考えれば、その対立原理は、土偶＝女性が

土でつくる＝女性原理の象徴＝ヒトの誕生と成育を表現し、ヒトの死に関わらない→石棒類＝男性が石でつくる＝男性原理の象徴＝ヒトの死に関わる場合がある、というものである<sup>(12)</sup>。

こうした男女の対立的な原理は、春成秀爾が予察しているように、生業における性別分業のありかたに根ざすもので、それが社会組織のありかたにも影響している〔春成 1986〕。土偶の副葬の始まりにみる女性原理のヒトの埋葬への関与、あるいは男性土偶の登場による男女一対の土偶の成立〔設楽 1994 b〕は、こうした縄文時代の基礎構造に弛緩をもたらすものであり、まさに縄文時代の終末にそれが顕著になるところに、変わりゆく文化と社会のひとこまをみることができる。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

### 謝辞

本稿を執筆するにあたって、忍澤成視、甲元真之、小杉康、佐原真、長瀬衛、長沼孝、橋本富夫、春成秀爾、山田康弘、渡辺誠の諸先生、諸氏にお世話になった。記して感謝する次第である。

(1995年5月7日)

### 註

- (1) 明確に男性性器を表現した土偶は、3例知られているにすぎない〔大場 1965, 島 1992, 他〕。
- (2) これらはおもに、縄文中期に住居内に立石の祭壇状施設が設けられたり、石囲炉の角に石棒がたてられたり屋内埋壘が発達したりすることなど、屋内に祭祀がもちこまれること、すなわちある種の祭祀が竪穴住居を単位におこなわれる傾向があること〔山本 1977〕と無関係ではないだろう。
- (3) たとえば青森県近野遺跡(後期初頭：113点)、岩手県立石遺跡(後期初頭～中葉：262点)、小田遺跡(晩期：113点)、手代森遺跡(晩期：179点)、九年橋遺跡(晩期：635点)、秋田県地方遺跡(晩期：128点)、埼玉県赤城遺跡(後期～晩期：113点)、千葉県西広遺跡(後期中葉～晩期：140点)、山梨県釈迦堂遺跡(中期：917点)などである〔国立歴史民俗博物館 1992〕。これらのうち、釈迦堂遺跡や小田遺跡例はかなり時期が限定できるので、比較的短期間に集中的につくられたと思われるが、はたして一回の儀礼に大量につくられたのか、少量が持続的に累積した結果なのか、判断が困難である。土偶の型式学的検討とともに、貝塚遺跡と同様な緻密な発掘調査が必要とされよう。また、逆にきわめて土偶の少ない時期の評価も課題である。たとえば関東地方では中期の加曾利EIV式や後期の称名寺式期がそうした時期である。この時期には男性に関わる石棒が発達する一方、女性に関わる土偶が衰退し、おそらくおもに女性がつくったであろう土器の文様にも力強さが失われていく。縄文の儀礼総体のなかでの土偶の位置づけが問題になるとともに、地域によっても時期によっても、あるいは集落の性格の違いによっても土偶の多寡には複雑な差が反映していた可能性を考えておく必要がある。
- (4) ハイヌヴェレという少女を殺すことによって、その切断された死体からさまざまな食用植物が発生したという説話を典型とする。古事記などにもみられる栽培植物起源譚である、いわゆる死体化生神話。
- (5) 春成秀爾は、旧石器時代にも素朴ながら死後の世界観を人々がもっていたことを、墓坑内への石器の副葬から推定している〔春成 1988〕。
- (6) 石棒は縄文前期に出現し、中期に中部、北陸地方で発達した男性性器をかたどった石製品である。石剣は、石棒が後期にいたって断面扁平に変形したものである。刀のように刃が片方についた石刀も含めて、石棒類と呼んでおく。
- (7) 兵庫県大開遺跡は弥生前期の遺跡で、縄文土器とは一線を画す遠賀川式土器と縄文土器の系譜を引いた長原式土器が共存しており、割れた石棒が出土している。報告者はこの破碎行為に縄文時代以来の祭祀の放棄という可能性を考えている〔前田 1993〕が、石棒類が割れて出土するのは縄文時代を通じて一般的であるので再検討の余地があり、社会情勢と結びつけて現象を解釈することのむずかしさを示している。

- (8) 調布市郷土博物館にて実見。
- (9) 縄文時代にはさまざまな動物形土製品がつくられ、ことに後期以降発達する〔土肥 1985〕。それはおもに狩猟対象動物をかたどったものだが、縄文時代を通じてイノシシとシカが狩猟対象動物の双璧だったにもかかわらず、土製品はイノシシが圧倒的でシカはきわめて少ない。イノシシは強くたくましく、一度に数匹のこどもを産むことがある。これに対してシカはちょっとでも傷をおうと死んでしまうことすらあるか弱い動物である〔千葉 1975〕。イノシシを土製品としてつくり、ときに打ち欠いて分配したのは、こうした多産と生命力の強さをシンボライズしたものにほかならず、土偶の破壊とも通底した行為だといえよう。
- (10) 橋本富夫教示。
- (11) およそ4m四方に石を配列した配石址1は、特殊な遺構ないし住居址と考えられている。その内部からは各種の遺物が出土しているが、南北2箇所に集中し、北群には石棒、打製石斧、敲石、打製石器などが伴い、南群には土偶、磨石、砥石、丸石などが伴う。耳飾り、磨製石斧は両群にみられる。こうした遺物の偏差から、馬場保之は「配石址1の内部に女性的な空間と男性的な空間が分かたれて存在した」と述べている。
- (12) 縄文前期に出現し、後期以降発達する配石が墓と深くかかわるのも、ヒトの死や埋葬に直接タッチするのはおもに男の役割であった可能性を高めるものと思われる。

### 引用文献引用・参考文献

- 荒巻美ほか 1986『沖II遺跡』藤岡市教育委員会。
- 新屋雅明ほか 1988『赤城遺跡 川里工業団地関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県埋蔵文化財調査事業団。
- 磯前順一 1987「土偶の用法について」『考古学研究』34-1 87~102頁。
- 植木 武 1990「土偶の大きさ」『季刊考古学』30 56~59頁 雄山閣出版。
- 宇田川 洋(編) 1981『河野広道ノート<考古篇1>』北海道出版企画センター。
- 大塚和義 1979「縄文時代の葬制」『日本考古学を学ぶ』3 36~54頁 有斐閣。
- 大場利夫 1965「男性土偶について」『考古学雑誌』50-4 294~298頁。
- 小笠原忠久 1976「北海道著保内野出土の中空土偶」『考古学雑誌』61-4 286~291頁。
- 忍澤成視 1994「千葉県市原市能満上小貝塚出土のイノシシ形土製品」『考古学雑誌』79-4 506~516頁。
- 小野正文 1984「土偶の製作法について」『甲斐路』50 19~22頁。
- 1990「土偶大量保有の遺跡」『季刊考古学』30 68~71頁 雄山閣出版。
- 小野美代子ほか 1979『岩手県稗貫郡大迫町立石遺跡』大迫町教育委員会。
- 1984『土偶の知識』東京美術。
- 葛西 励 1983「縄文時代中期、後期、晩期(葬制の変遷)」『青森県の考古学』212~300頁 青森大学出版局。
- 金子裕之 1982『縄文時代III』(『日本の美術』4) 至文堂。
- 桐原 健 1978「土偶祭祀私見」『信濃』30-4 241~255頁。
- 甲野 勇 1939「容器的特徴を有する特殊土偶」『人類学雑誌』54-12 545~551頁。
- 河野広道ほか 1954『静内町先史時代遺跡調査報告』静内町役場。
- 国立歴史民俗博物館 1992『土偶とその情報』(『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集)。
- 小杉 康 1986「千葉県江原台遺跡および岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品—所謂亀形土製品、土版、岩版の型式学的研究と用途問題—素描—」『明治大学考古学博物館館報』2号 51~88頁。
- 小林達雄 1977「祈りの形象—土偶—」『日本陶磁全集』3 45~53頁 中央公論社。
- 1988「男と女」『古代史復元』3 173~182頁 講談社。
- 酒井忠雄・江坂輝弥 1954「山形県飽海郡蔵岡村杉沢発見の大洞C<sub>2</sub>式土偶の出土状態について」『考古学雑誌』39-3・4 225~226頁。
- 坂井信三 1988「身体加工と儀礼」『儀礼 文化と形式的行動』193~213頁 東京大学出版会。
- 桜井徳太郎 1974「変身のフォークロア」『変身』1~64頁 弘文堂。
- 佐々木宏幹 1987「他界」『改訂文化人類学事典』261頁 ぎょうせい。
- 笹沢 浩 1982「阿久遺跡の集落構造とその変遷」『長野県埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—』326~339頁 長野県教育委員会。
- 設楽博己 1993「縄文時代の再葬」『国立歴史民俗博物館研究報告』49 7~46頁。
- 1994a「壺棺再葬墓の起源と展開」『考古学雑誌』79-4 383~417頁。

- 1994b「農耕文化が土偶を変えた」『歴博』67 8～9頁。
- 島 亨 1992「知られざる縄文」『古美術 緑青』6 64～87頁 マリア書房。
- 鈴木克彦ほか 1984『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館。
- 鈴木正博 1982「埼玉県高井東遺蹟の土偶について」『古代』72 1～8頁。
- 1993「荒海貝塚文化の原風土」『古代』95 311～372頁。
- 澄田正一ほか 1970『新編一宮市史』資料編1。
- 高橋正勝ほか 1986『大麻3遺跡』（『江別市文化財調査報告書』20）江別市教育委員会。
- 高山 純 1977「配石遺構に伴出する焼けた骨類の有する意義（上）・（下）」『史学』47-4 35～65頁・48-1 49～74頁。
- 谷口康浩 1990「土偶のこわれ方」『季刊考古学』30 63～67頁 雄山閣出版。
- 千葉徳爾 1975『狩猟伝承』法政大学出版局。
- 寺村光晴 1961「三角形土製品と特殊な出土状態を示した土偶」『柝倉』123～130頁 栃尾市教育委員会。
- 土肥 孝 1985「儀礼と動物—縄文時代の狩猟儀礼—」『季刊考古学』11 51～57頁 雄山閣出版。
- 鳥居龍蔵 1922「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学雑誌』37-11 371～383頁。
- 仲田茂司ほか 1987『西方前遺跡』II 三春町教育委員会。
- 長沼 孝 1992「北海道の土偶」『土偶とその情報』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集）52～70頁。
- 長野県教育委員会 1973『昭和47年度中央道遺跡発掘調査報告書 高森地区その2』。
- 永峯光一 1977「呪的形象としての土偶」『土偶・埴輪』（『日本原始美術大系』3）155～171頁 講談社。
- 中村良幸ほか 1979「岩手県稗貫郡大迫町小田遺跡」大迫町教育委員会。
- 1989「根室市初田牛20遺跡出土の土偶」『初田牛20遺跡発掘調査報告書』43～57頁 根室市教育委員会。
- 新津 健 1985「石剣考—中部、関東を中心とした出土状況から—」『研究紀要』2 23～42頁 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター。
- 野口義麿 1974「遺構から発見された土偶」『古代史発掘』3 99～110頁 講談社。
- 野村 崇ほか 1974『札苅遺跡』木古内町教育委員会。
- 1976「木古内町札苅遺跡出土の土偶にみられる身体破損について」『北海道考古学』12 45～50頁。
- 能登 健 1983「土偶」『縄文文化の研究』9 74～85頁 雄山閣出版。
- 1992「群馬県の土偶」『土偶とその情報』（『国立歴史民俗博物館研究報告』第37集）204～217頁。
- 馬場保之ほか 1994「中村中平遺跡」長野県飯田市教育委員会。
- 林 謙作 1976「亀ヶ岡文化論」『東北考古学の諸問題』168～203 寧楽社。
- 原田昌幸 1990「頭だけの土偶」『季刊考古学』30 12頁 雄山閣出版。
- 1995「土偶」（『日本の美術』2）至文堂。
- 春成秀爾 1986「縄文・弥生時代の婚姻居住様式」『日本民俗社会の形成と発展』391～414頁 山川出版社。
- 1988「葬送の世界」『図説検証 原像日本』2 168～188頁 旺文社。
- 浜野美代子 1990「縄文土偶の基礎的研究」『古代』90 53～73頁。
- 藤沼邦彦 1979「土偶—付 土製仮面・動物形土製品—」『世界陶磁全集』1 177～184頁 小学館。
- 藤森栄一 1969「縄文の呪性」『伝統と現代』8。
- 前田清彦ほか 1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会。
- 前田佳久 1993「石器」『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』181～199頁 神戸市教育委員会。
- 馬目順一・山田 広 1972「福島県双葉郡富岡町毛萱遺跡発掘調査報告書」『南奥考古学研究叢刊』2。
- 三沢正善ほか 1982「乙女不動原北浦遺跡発掘調査報告書」小山市教育委員会。
- 水野正好 1974「土偶祭式の復元」『信濃』26-4 298～312頁。
- 1979「土偶」『日本原始美術』5 講談社。
- 1983「縄文社会の構造とその理念」『歴史公論』9-9 31～39頁 雄山閣。
- 峰山 巖 1967「高砂遺跡の配石遺構」『北海道の文化』12 北海道文化財保護協会。
- 宮坂光昭 1990「第500号土壌出土の大形完形土偶について」『棚畑』658～662頁 茅野市教育委員会。
- 武藤雄六 1975「八ヶ岳南麓中期縄文の衆」『どるめん』5。
- 森 貞次郎 1983「長崎県南高来郡原山遺跡」『九州の古代文化』21～31頁 六興出版。
- 森田知忠ほか 1984『美沢川流域の遺跡群』VII 北海道埋蔵文化財センター。

八代町誌編纂室 1975『八代町誌』。

山崎義男 1954「群馬県郷原出土土偶について」『考古学雑誌』39-3・4 220~225頁。

山田康弘 1994「有文石棒の摩滅痕—茨城県岩井市香取塚古墳表採の石棒を中心に—」『先史学・考古学研究』5  
85~92頁 筑波大学歴史・人類学系。

————— 1995「多数合葬の意義—縄文時代の関東地方を中心に—」『考古学研究』42-2 52~67頁。

山本暉久 1977「縄文時代中期末・後期初頭期の屋外埋甕について」『信濃』29-11・12 33~56・48~64頁。

八幡一郎 1939「日本先史人の信仰の問題」『人類学・先史学講座』13 雄山閣。

吉田敦彦 1976『小さい子とハイヌウェレ』みすず書房。

米田耕之助ほか 1977『西広貝塚—上総国分寺台遺跡調査報告』III 上総国分寺台遺跡調査団。

————— 1984『土偶』ニューサイエンス社。

和田千吉 1917「信濃国腰越発掘土偶」『考古学雑誌』8-3 176~177頁。

渡辺 新 1991『縄文時代集落の人口構造』。

渡辺 誠 1979「原初の神々」『講座日本の古代信仰』2 34~64頁。

挿図の出典：図1 = 国立歴史民俗博物館藏品写真，図2 = 長沼1992文献および高橋ほか1986文献より，図3 = 前田ほか1993文献および荒巻ほか1986文献より。

## Clay Figurines as Burial Goods

SHITARA Hiromi

Clay figurines, which are typical ritual objects of the Jomon Period, were abstract representations of the mature female, kept as symbols of her fecundity in child bearing. Many of these figurines are found in a broken state, and not associated with any particular structure or facility. Some researchers believe that the figurines were broken deliberately, but others do not agree with this interpretation. In the late and Latest Jomon Periods, stone cylinders, clay tablets, stone tablets and stone figurines appeared afresh. There is clear evidence that many of these were deliberately broken or burned. This indicates that there is a high probability that the clay figurines were also deliberately broken as part of some type of ceremony. Ritual objects deliberately broken in ceremonies were sometimes repaired and used again.

Another important characteristic of clay figurines is that they were not associated with burials. In Hokkaido, however, burial goods become common as concepts of the afterlife developed, and clay figurines began to show up as burial goods from the later stages of the Late Jomon Period. In the final stages of the Latest Jomon, these burial practices spread from southern Tohoku to the Tokai Region. From the end of the Jomon Period through the beginning of the Yayoi Period, the practice of reburial arose in the Chubu Region. Clay figurines were used as burial goods in the reburial grave, and later evolved into the receptacle used to hold the bones when reburying.

The reburial practices that developed in the Chubu Region in the Yayoi Period were based on concepts that started in the Latest Jomon. The bones of several individuals were cremated and reburied together. This type of group burial, in which the bones of the deceased were broken and burned, is structurally similar to the breaking of clay figurines and both can be thought of as symbolizing the wish for rebirth and renewal. Behind these beliefs are feelings towards the natural world, which is responsible for creation of human beings.

Throughout most of the Jomon, clay figurines were not found in association with burials. In contrast, stone cylinders, which were the representation of male sexuality, were associated with burials. This difference is rooted in sexual principles based on the division of labor in Jomon society. The use of clay figurines as burial goods, which began in late Jomon, reflects the social changes associated with the transition from the Jomon to Yayoi Period.